



## ご挨拶

水澤雪下ひとり雑誌

雪下

第四十六号

2024/7/29 発行

題字：高橋弘美

先月お知らせしたが、雑誌をどうするか決めた。それで、今号はその話に終始している。

相変わらずひとりであれこれ試行錯誤しながら進んでいるのだが、そうした試行錯誤そのものが実は無意味だったということがわかり、たいへんな回り道をしたということがわかってもお、では回り道しないほうがよかったのかというと、別にそうでもない。回り道や失敗による学習の効果には、一種瞠目すべきものがあって、そうしたもどかしさを抜きにしてひたすら効率よく学び進んでゆこうとしても、思うほどうまくはいかないようである。どうも自分にとって肝心な、決定的な問題ほどそういう傾向を持つように見えるが、これはまたずいぶん不思議なことだと思う。

人がなにか重要なことを理解するには、時間や経験というものでかろうじて測ることのできる、ある種の質量の蓄積みたいなものがどうしても必要らしい。それが一定の量を持つにいたってはじめて何かわかる、というのが、どうやら凡人の宿命であるらしい。

## 今号の内容

### 今後の雑誌について

#### 今後の雑誌について

そもそも、なぜ雑誌の発行についてあれこれ考えるようになったかは前号に述べた。わたしにひとり雑誌というアイデアを授けてくれたKさんの亡くなったことがそれである。

とはいえ、その前から、考えてみればいぶん前から、この雑誌のサブスクリプション制度というものには疑問を抱いていたような気がする。そもそも有料で自分の書いたものを売りつけようなどと思っただのは、自分の文章は有料級であるなどという自信があったからでは毛頭なくて、このような試みをはじめた当初、どうしてもなにかで金を稼がねば生きてゆかれないという、雖も逝かない土壇場の切迫感があつたからである。

ところで、自分の書いたものは金を取るに値するなどという、そんな自信は何ものも持つに値しないし、なにが有料となりなにが無料となるかは、これもまた人の意志の問題というより、ほとんど運命の問題である。そもそも、ものを書いたり描いたり作ったりすることを喜びとするような人間は、天がその

者に何ものにも代えがたい幸福をすでに与えているのであって、こういう者にとっては、ただものを作ることそれ自体が、子どもの無心の遊びにも似た、尽きぬ喜びなのである。

それは実際、子どもの遊びとなんら異なるところがない。遊びそれ自体の楽しさに夢中になって、彼らは絵を描いたり歌ったりお話を考えたりといった遊びに熱中する。この素朴で力強い喜びを、金銭に換えて食い扶持としなければならぬなどと考えるところに、彼らの不幸が出来るのであって、こうした不幸をどこまで背負うかもまた、その者に与えられた宿命の一環である。

考えてみれば、医者になるには多額の金がかかる、だから医者は高給取りでなければやっていかれない、という考えは、なんとなく正当なもののように思われ、誰しも納得のゆくもののように思われる。医者というものが社会に必要とされる資格であり高度の教育を要し、しかも人命を預かる職業である以上、その重責をも加味して高い報酬を与える、というのは理屈であるように思われる。これはいわば社会的な要請とそれに伴う諸経費が釣りあうような職業であるから、あまり矛盾が生じない。大いなる矛盾が生じるのは、もの書きだの歌歌いだの絵描きだの場合である。

彼らも人だから、人と同じように衣食住を要求する。その意味での必要経費は、医者などとまったく

異ならない。ところが彼らは、医者のような形で社会に役立つのではない。なんとすれば、一生のあいだ一度も役に立つことなしに死んでゆく場合がある。こうした人間を抱えておくだけの余力がその社会の経済にあるうちはよいが、その余力がなくなつてくると、こうした人間にとっては悲劇的な様相を呈してくる。人間にはなんとしても金銭に還元しかねるものがあり、そうした還元しかねるものを一身に背負っているのが、このもの書きだの絵描きだの歌歌いだのという連中なのだ。世が不景気な不穏で、人々の関心が実際の事柄のほうに傾けば傾くだけ、彼らの存在の余地はせばまり、犠牲は大きくなるのである。

世の中はいま、自己の時間だろうと趣味だろうとなにがなんでも金銭に換えてやろうという志の高い人々であふれているが、寸暇を惜しんでポイントをためたり、小銭を稼いだり、なにかちよこまかと作って表へ出してみたり、そういうあらゆる努力が要するに、内村鑑三の言う金を稼ごうとすると非常に穢く見える人たちの金の稼ぎ方ということになるだろう。ほんとうに金を稼ぐ人というのは、金というものの対して、多少しおらかな関係を築いているように見える。おおらかという表現が適切かどうかかわからないが、要は自分本位でない、穢くない関係を築いているように見えるのである。

彼らは、自分が金持ちになりたいから、思うまま

の生活をしたいから、なんとしても一旗揚げたいから、というような見で金と接しているのではないように思われる。というのも、金にとってみれば、彼らはいわばお気に入りの、気心知れた親しい連中なのであって、彼らのすることは金の気に入り、金のこととは彼らもまた気に入るという、そういう一種の親密さを互いに抱きあっているように見える。

それはちょうど人間のあいだの友情や愛情と同じように、なぜあの人なのか、なぜわたしでないのか、などと考えても、答えは永久にわからぬたぐいのものである。もつとも、こうした友愛の精神だけが金の本質というわけでもなく、この御仁はまた人と同じく、時に神にも悪魔にもなるのだが。

ともかく、ここまで来てしまうと、非常な金持ちとわれわれ役立たずの遊び人どもとは、一周回ってにわか接近して来ないでもない。というのも、われわれ救いようのない遊び人どもも、別に自分本位の気持ちから遊んでいるわけではなく、ただなんの因果か、自分にびつたりくるひとつの遊びが、生まれながらに授けられているというだけのことなのである。

われわれはただ、なぜか自分に与えられた、お絵かきだの歌だの踊りだのといった遊びが楽しいから遊ぶのであって、このおれの歌声はどうだとか、この描写のみごときはどうだとか、そんな思いをするのが楽しくてやっているのではないのである。もつ

と言えば、その人がいかに歌がうまかろうと、絵がうまかろうと、そんなことは実はあまり問題でないで、それはその人の努力やなにかでそうなっているのでもなければ、その人という人間とも、本当はあまり関係のないものである。わが徳が優れていればわが才が伸びるわけではないし、その逆というわけでもない。

自己の才能というものが、自己を超越したところから付与されているものであり、それと自分自身とのあいだには、因果関係があるようになにもない。こうした厳肅な事実が、われわれから虚栄心や闘争心を剥ぎとってしまう。たいへんな金持ちとわれわれとに共通のなにかがあるとすれば、動機の根底に、虚栄心があまり関与していないことだろう。彼らはただ自分にとってごく自然な活動を営んでいるだけであって、それが結果としてときに大金を動かすことになったり、たいへんな芸術をこしらえることになったりするのだが、それはただそうすることが自分にとって自然だからそうするのである。それが本能的なものだからそうするのである。人に見せびらかしたいとか、よく思われたいというような心は、彼らの理屈を超えた本能の前にはほとんど無力である。

一方で、これはまた不思議としか言いようのないことだが、金を稼ぐに際して少しも気どるところのない人が、下手に中途半端な文才など持つと自己顕

示の塊と化すことがあり、逆に文章を書くに虚心坦懐、誠実で少しも偽りのない人が、金に関しては見栄と強欲の鬼と化すこともある。

こうしたことはみな、まことに不思議なことである。考えれば考えるだけ不思議である。しかしその不思議をあくまで不思議として、おのれの理解を超えたものとして誠実に受けとめるとき、自分になが与えられ、なにが与えられていないのかを謙虚に受けとめるとき、その人ははじめて自己の運命と心中する決意を固めるのに違いない。自己の運命と自己の思惑とは、必ずしも一致するものでなく、ときにまったく正反対の様相を呈することもある。そのなかでうめき、息も絶え絶えにあえぐときに、しかし運命のほうでは人を優しく抱擁しているのであって、その抱擁を苦しいさなかにもどこかで感じられるかどうか、結局その人の度量ということにもなる。

そしてなにが自己の運命であり、なにが自己の運命でないかを、運命そのものが知らしめてくれるのを疑わないこと、そういう形で運命を信頼することを知った者は、歯噛みし悔し涙を流しながらも、自己にふさわしくない虚栄心をあきらめ捨ててゆくという、そういう知恵を身につけるに違いない。そうした知恵に最終的に道を譲ることは、決して敗北ではない。ほんとうの敗北とは、身の丈に合わない虚栄の虜になり下がることを言う。そのときその人は、

自己というものを見誤ったのである。自己のなすべきことがらについて、自分を欺いたのである。

ここに至って、ようやく話がもとへ戻るが、わたしはなにを欺いてもよいが、自己を欺くのはいいやである。つまり自己の運命を欺くことだけはいやである。わたしもまた人である以上、自分なりの虚栄心というものを持っている。そして往々その虜になりかけるが、それはわたしという生きた人間の問題であって、わが運命の問題ではない。運命は明白に道を示すが、人がそれを読み違える。運命は美しく誘っているが、人がそれを穢すのである。

とはいえ、そのこと自体もまた、運命を相手に戦ってみなければわからぬことである。運命と一度も勝負をしないまま、自分の夢想する自己の可能性というものに一度も賭けてみることはないまま、運命の腕にやすやすと抱かれて漂いつづけると、親身に寄り添う美しい女であった運命が、実はおそるべき魔物だったということになりかねない。運命はどうもそういう性質を持つもののようなのである。自分にあくまで食らいつき、戦いぬく気概のあるものだけに、運命はその姿を明らかにするようである。

ここまで来ることは、確かにひとつの途方もない事業である。しかし結局そのように生きなければ、生きた気にならないのが人である、ということになりはしないか。

このようなしだいで、わたしの虚栄心のひとつを手放すときがきた。否、手放すなどという言葉は、それこそちよつと気どりすぎである。実際には、そんな潔いことでなく、ただ自己の敗北を認めるのみである。すなわち、わたし自身の知恵によつては、この世にいかなる富も生み出すことができぬということとを認めること、そしてそれでもなおわたしがのうのうと、あふれんばかりに恵まれて生きていることを痛感することである。ここに至って、わたしはまたあの聖書の言葉を思い出す。野の花は骨折りも紡ぎもせず、空の鳥は種まきも刈り入れもしないが、天の父はこれらを養っているではないか、と。

わたしを養うものを天の父と呼ぶか、運命と呼ぶか道と呼ぶか、そんなことはどうでもよいが、ものごとはおのずからなる、逆らわずにおれ、という教えが身にしみて感じられるのは、確かに青年期を過ぎてからである。これから世に出ようという人に向かつては、この教えはあまり役に立たない。しかしそんな時期をもう過ぎた人たちにとっては、まことに心強い教えのはずである。わたしはいま、その教えに身を譲る。そして敗北することによつて真実の敗北から免れることを願う。

そういう願いをこめて、わたしはこの雑誌の有料であることをやめ、全部ウェブ上に置いておくことにする。そして今後も雑誌の発行は続けるが、今後はすべて無料で公開することにする。だが有料と無

料とがなにかを分けるということは、わたしの場合まず考えられない。おそらくこのような人間だけが、真実に無心に遊ぶことを許されているのだと思う。わたしの遊びは料金の外にある。金の外にあるものを、金で地上に引きとめておくことはできない。ちょうど人間の精神を、金でとどめ置くことができないように。

つまり今後の方針としては、こういうことになる。

- 一、ひとり雑誌「雪下」はその刊行をつづける
- 二、ただし、料金を払わねば読むことができないという制度は廃止する。
- 三、制度を廃止するのだから、これまで有料にしていたものも無料にする。つまり、過去の雑誌も追々ウェブサイトにアップして、誰でも読めるようになる。

三に関しては、もしかすると異論が出そうである。そんならこれまで払った金はどうなるのかという意見である。これに関しては、もう平に謝って容赦していただくよりほかない。そういう時が来てしまったので、自分にもどうしようもないのである。

さらに、いま現在月額料金をお支払いいただいている方についてであるが、これについては悩みに悩んだが、サブスクリプションの解除はご自分で行っ

てください。方法はメールでご案内しております。解除を強制はしません。するもしないもご自由にお願います。解除しない方がもしいたら、その方には今後もメールで雑誌をお送りするやり方を続けようと思います。

ところで、なぜこの部分を人任せにするのかという、他人の意志の問題だからという以外にない。現在雑誌を購読していただいている方は、いつだか一度こちらで登録を解除したことがあるが、結局また登録してくださった方々である。こういう方については、わたしがどうこうする領域を超えているのではないかと思われる。金の入ってくる道をみんな遮断して、どうだおれは金に穢くないぞ、などとやついているのはただの自己満足であり、それはそれで、わたし自身の姿に誠実でない。第一、そういう方法をとることは、よほどの人にもなお許されないことであって、ほんとうの聖人というもの、そこからへの葛藤や執着すらすでに超えてしまっている人のことである。そういう人は、自分が人間であることを知っており、この世の要求についても熟知しているものだ。自分だけは例外で、金などいっさい触れないですんでいるのだ、などと思いが上がっているようでは、その人は自分のことをまるでわかっていない。

なにに金を払うか、なにが金を払うに値するか、という問題は、結局、各人のものである。この問題

に関して、わたし自身があくまで欲したり、あくまで身を引いたりするのをやめるだけで、わたしの負担というものがずいぶん減る。金はわたしの分ではないから、その流動はいつさい人に任せて恥じないでいる。それがわれわれ、つまりわたしと金との、現時点での適切な関係ではないかと思う。

金というものは、まことにわたしの急所である。しかし急所をかなぐり捨ててみれば、それはもはや急所でない以上、何人もそれでもってわたしの息の根を止めることはできないことになる。他人と争うことをしなければ、世界中に彼と争うことのできる者はいないと老子にあるが、同じことである。そこへ到達するまでがずいぶんなことであるが、到達できぬこともないのである。



Lan Ying : Watching Waterfall

二〇二四年七月二十九日  
水澤雪下  
<https://mjibms.com/>